琉球大学学術リポジトリ

「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (1)　―沖縄社会へのインパクト―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): 越境的ネットワーク,
	ウチナーンチュ大会, 県系人ネットワーク, 移民
	キーワード (En):
	作成者: 金城, 宏幸, Kinjyou, Hiroyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010153

「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（1）
—沖縄社会へのインパクト—

金 城 宏 幸

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．沖縄社会と「移民」
Ⅲ．ウチナーンチュの越境的ネットワーク
Ⅳ．世界のウチナーンチュ大会
Ⅴ．「ウチナーンチュ大会」と「県系人ネットワーク」
Ⅵ．「県系人ネットワーク」のインパクト
　1）社会活性効果
　2）国際理解教育の深化
　3）沖縄文化の覚醒
Ⅶ．おわりに

キーワード：越境的ネットワーク，ウチナーンチュ大会，県系人ネットワーク，移民

Ⅰ．はじめに

人々の移動（離散）と定住，コミュニティの形成，そして文化の再編成や価値観の創造，あるいは発信という視点で，ウチナーンチュ[1)]に関する研究が少なからず見られるようになった。確かに，日本という国の中で，あるいは移民した海外の地でコミュニティを形成してきたウチナーンチュたちが，これまでとは異なる主体性を発揮しながら越境的に交流し始め，ネットワークを通して新たな社会空間を模索しつつあるように見えるのは興味深いことである。こうした動態は，しかしながら，何もウチナーンチュに限ったことではない。ユダヤ人や中国人，あるいはフィリピン人といった多くの民族も同様の営為をしてきたのであり，我々の関心は，はたしてそこに，沖縄型のモデルやパターン，ウチナーンチュであるがゆえの必然性といったものが存在するのだろうかということであろう。おそらく，そのことを明確に提示することが不可能だとしても，その形態の輪郭とそこから生成されつつあるものを確認しようとする試みは無駄ではないであろう。そしてそれは，「ウチナーンチュとは何か」，という究極の問いに収斂されていく作業の一つに他ならない。

琉球大学法文学部の教員7名で構成する研究チームは，2005年から2007年までの3年間，日本学術振興会の科学研究費補助金の交付を受け，研究課題「沖縄社会の越境的ネットワーク化とダイナミズムに関する研究」のもと，海外や国内各地に形成されたウチナー

ンチュ・コミュニティについて，多角的な視点で調査研究を行ってきた。

各研究分担者がそれぞれの課題とアプローチで研究調査を実施してきたが，特に 2006 年 10 月に「第 4 回世界のウチナーンチュ大会」が開催されたのを好機と捉え，世界各地から参集した約 5,000 名のウチナーンチュに対する「アンケート調査」を同研究チームの重点プロジェクトに位置づけ，第 4 回世界のウチナーンチュ大会実行委員会（沖縄県）との共催で実施した。東シナ海に浮かぶ小さな島にルーツを持つ多国籍の人々が，「ウチナーンチュ」という旗の下に，大海を越えて，これほどの規模で参集し交流するというイベントは，他に類を見ないユニークなものであり，定量的調査の意義があると判断したのである。設問の内容は，4 回目となるウチナーンチュ大会への評価や県系人の越境的なネットワーク活動などに関するものが中心であるが，4 言語（日本語・英語・スペイン語・ポルトガル語）による調査票約 5,500 部を配布し，最終的に 794 票が回収された。

集計作業が完了したことを受け，同重点プロジェクトに直接関わった 3 名（金城，野入，鍬塚）が，調査で得られたデータを基に，「世界のウチナーンチュ大会」と県系人ネットワーク，というテーマで分担執筆するが，本稿ではその研究の背景と目的，分析で得られた知見などについて概論する。

Ⅱ．沖縄社会と移民

ウチナーンチュを知るためのキーワードの一つは「移民」である。現代では沖縄から海外に移住する人はごく僅かだが，近代史において海外/県外への移民は沖縄にとって重要な意味を持っていた。沖縄の 20 世紀は，まさに海外移民が社会現象であった時代といえよう。1899 年，一群の沖縄人がハワイに向けて那覇を出港，翌 1900 年に移民 26 人がオアフ島に上陸したのを嚆矢に，南北アメリカ大陸や南洋諸島，フィリピンなどへとウチナーンチュの移民と定住，言い換えればウチナーンチュ・ディアスポラが始まるのである。

沖縄県は，全国でも海外への出移民数の多かったことで知られるが，例えば，第二次世界大戦前の沖縄では，県民の概ね 10 人に 1 人が海外に在留していたという。日本有数の移民県と称されるほどに多くの人々が送り出された結果，表 1[2)]にみられるように，現在では海外に多数の県系人が居住し，ウチナーンチュ・コミュニティを形成するに至ったのである。

よく知られているように，このような出移民の最大の要因の一つは，経済的な背景であった[3)]。産業構造が脆弱であった沖縄県にとって，移民とは過剰人口の解決策であり，移民の父と称される當山久三や大城孝蔵などの移民啓蒙家の存在がそれを推進した。当時，移民したウチナーンチュによる海外からの送金は極めて重要な経済的な支えとなっており，沖縄県民にとって海外移民は経済的な生命線でもあった。

異国の逆境のなかで身を削るようにして送金し続ける，故郷を想うウチナーンチュのチ

表１　海外日系人数と沖縄県系人数（2005 年）

［単位：人，%］

国　名	日系人総数	沖縄県系人数	沖縄県人比率
ブラジル	1,690,261	169,026	10
アメリカ合衆国	1,115,880	89,270 （ハワイ）	8
ペルー	95,061	66,542	70
アルゼンチン	36,848	25,793	70
ボリビア	10,400	6,239	60
カナダ	69,889	1,397	2
メキシコ	16,918	845	5
その他	33,874	2,032	6
計	3,069,132	361,144	12

資料：沖縄県観光商工部交流推進課『国際交流関連業務概要』（2006 年）より作成。

ムグクル（熱い心）は，沖縄が第二次世界大戦で焦土と化した際には，ひと際ドラマティックなエネルギーとなって表出する。戦後，故郷の惨状を知ったウチナーンチュたちは，沖縄救済のために立ち上がり，様々な団体が結成されて，可能な限りの復興活動に尽力したのである。このハワイを震源地とする沖縄救済運動の波紋は瞬く間に国境を越え，米国本土各地，メキシコ，ペルー，ブラジル，カナダ，アルゼンチンと，ウチナーンチュ移民のいるいたるところで展開される。それは，様々な生活物資を故郷へ送る大きなうねりとなり，「550 頭の豚輸送」[4]に代表されるように，戦後沖縄の復興を根底から支えた，国境を越えた壮大なプロジェクトとなった。

しかしながら，このように沖縄の生活史の重要な出来事となった出移民も，20 世紀後半になると様相が変化する。それまでの「社会現象」は，海外の各地にウチナーンチュ・コミュニティを出現させる一方で，その熱は波が引くように冷めていったのである。第二次世界大戦前には年間 4,000 名以上もの人々が沖縄から海外に出移民することもあったが，戦後に再開するも 60 年代になると急激に減り始める。本土復帰の 1972 年を境に，公に把握される移民の数も年間 100 名を割るようになり，80 年代後半には数名となって，1992 年には送り出し業務を取り扱う国際協力事業団沖縄支部も廃止される。かくして沖縄では，県民の日常の情景から「移民」の文字が薄れていくが，一方で，海外においては，ウチナーンチュたちがコミュニティを中心に生活を営み，故郷から遠く離れたディアスポラの民のように「オキナワ」が健在であり続けた。当然のことながら，親子や兄弟など，近親者の交流は海を隔てても続けられたであろうし，沖縄県政は，それまでの送金や戦後の復興支援の恩に報いる形で，海外県系人の要望に応えつつ子弟留学制度を続け，県人会館などの建設に財政支援を行ってきた。

Ⅲ．ウチナーンチュの越境的ネットワーク

このように，本土復帰後は沖縄県民の移民熱が冷めていくが，時期を同じくして，「移民県沖縄」と海外「ウチナーンチュ・コミュニティ」のあいだには新たな状況が展開し始める。経済生活の向上をある程度達成した沖縄県民は，世界的な文化思想の潮流に呼応するように自らのアイデンティティを模索し，海外に多くの，同胞を有する地域特性を再認識し始めるのである。80年代にスタートする沖縄のメディアによる「世界のウチナーンチュ」を意欲的に取り上げる試みなどが大きな刺激となり，集団のライフコースとしての移民の歴史を広く県民の間に思い起こさせ，海外における「ウチナーンチュ」の存在を再認識させたのである。

琉球新報社は，1984年1月1日，かねてから社内で計画されていた「世界のウチナーンチュ」の連載企画をスタートさせる。本土復帰10周年を迎えた際の社を挙げてのものであったが，その趣旨は，県民の持っているバイタリティーをもう一度呼び起こすというものであった。このねらいは的中し，多くの読者を引きつけながら，翌年1985年12月28日まで484回，毎回カラーで，2年間にわたる長期連載となった。筆者も，1984年元日の新聞に掲載された，スペインのカナリア諸島に逞しく生きるウチナーンチュの特集記事を，衝撃をもって読んだことを鮮明に覚えている。

また同社は，この連載企画と並行して前年の1983年から週1回「海外ウチナー事情」の見出しで世界各地のウチナーンチュに関する情報に紙面を割いており，これは定番として現在でも続いている。

新聞社の取り組みが予想以上の反響を得る一方で，沖縄テレビ（OTV）も同様の番組を制作し，テレビで放映し始める。1987年には自社製作番組『沖縄発われら地球人』をスタートさせ，1996年まで135回にわたり世界で活躍するウチナーンチュたちの様子を映像で伝え続けた。1997年からは番組名を『世界ウチナーンチュ紀行』に変えて2001年まで62回の放映を終えている。この沖縄テレビの番組も人気を博して多くの視聴者を魅了した。

このようなメディアの活動は，当然のことながら県内在住の人々のみならず世界に散在するウチナーンチュにも反響が及び，国境を越えて連帯感を再認識し，共鳴し合うようになる。こうした状況は，今日のウチナーンチュの越境的なネットワーク活動という新たなエネルギーを生み出す契機となり，その原動力となったのである。

Ⅳ．世界のウチナーンチュ大会

こうした「世界のウチナーンチュ」意識が盛り上がりをみせるなか，復帰後20周年という節目を数年後に控えて，沖縄県政では，あらたな振興策の目玉を模索していた。そして，日本における南の国際交流拠点の形成という県政の施策の延長線上に，移民一世の故郷への想いと二世・三世などのルーツ探しを熱望する声，そして沖縄県民の誇りとロマン

を将来に見出したいという願いが交差する形で，ついに1990年，「第1回世界のウチナーンチュ大会」がその開催をみる。世界に居住するウチナーンチュたちがルーツの地で一堂に会するという壮大な企ては，その後，第2回（1995年），第3回（2001年），第4回（2006年）と開催を果たし，ウチナーンチュの越境的な連帯（ネットワーク）を強化しつつ，図1・2に見られるようにその参加者も増加し続けている。

このすぐれて沖縄的な一大イベントは回を重ねるごとにその内容も充実し，今や国境を越えて散在するウチナーンチュ・コミュニティを結び付ける求心力としての，最も効果的で最大のイベントに発展しているといえるだろう。参加者の増加傾向も注目に値するが，開催のたびにウチナーンチュのネットワークを深化させるようなプロジェクトが創出されているのも興味深い。

第1回大会では，「ウチナー民間大使制度」[5]が発足し，第2大会では，国際的な経済ネットワークとしてのWUB（ワールドワイド・ウチナーンチュ・ビジネス・アソシエーション）[6]の設立の刺激となった。第3回大会では，「ジュニアスタディーツアー」[7]がスタートし，第4回大会では，教材『沖縄移民』[8]の作成と併せて，「一校一国運動」[9]を始動させ，「ホストファミリーバンク構想」[10]が公表された。

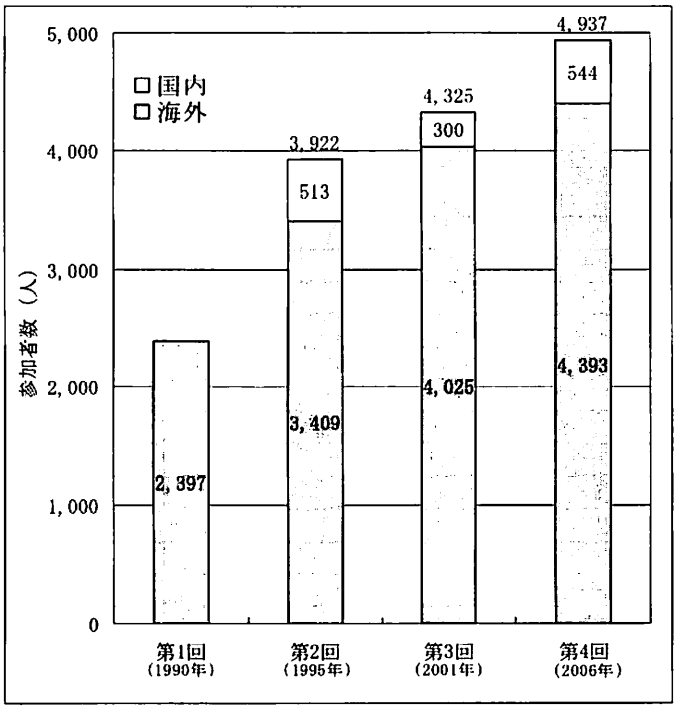

図1　世界のウチナーンチュ大会参加者数の推移

資料：第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会

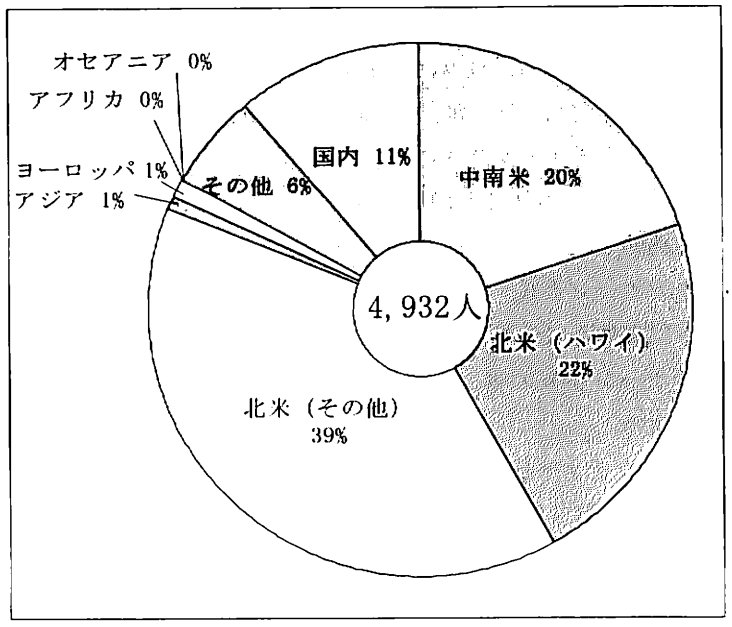

図2　第4回世界のウチナーンチュ大会参加者の内訳

資料：第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会

表2　「第4回 世界のウチナーンチュ大会」で参加した行事（設問11）

［単位：票，%］

選択肢　（複数回答可）	回答数	回答率
(1)　平和体験・植樹ツアー	83	11.0
(2)　前夜祭パレード	83	77.7
(3)　開会式	83	89.4
(4)　ウチナーチャンプルーフェスタ	83	52.1
(5)　ワールドウチナーシンポジウム	83	10.3
(6)　ワールドビジネスフェア・シンポジウム	83	6.2
(7)　ミュージカル公演「海から豚がやってきた!!」	83	22.4
(8)　琉球古典芸能鑑賞会	83	20.0
(9)　首里城公演「琉球王朝－舞への誘い」	83	26.6
(10)　平和ワーク「世界と沖縄」展	83	7.0
(11)　空手道・古武道交流祭	83	5.3
(12)　国際親善ゲートボール大会	83	3.6
(13)　国際親善サッカー大会	83	0.3
(14)　NHKのど自慢	83	6.8
(15)　琉球交響楽団コンサート	83	26.0
(16)　閉会式・グランドフィナーレ	83	71.0
(17)　その他の応援イベント	83	7.2

資料：「第4回　世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注：回答率は設問11についての有効回答754票を100%としたもの。

表2のように，第4回大会では，前夜祭パレードに始まって閉会式まで，沖縄の伝統芸能や空手，県系人ネットワークに関するシンポジウム，パネル展示会など様々な行事やイベントが実施された。こうした実行委員会主導の行事以外にも，親族間の集まりや芸能流派ごとの発表会・研究会，あるいは各市町村の歓迎交流行事など，実に多彩な催しが繰り広げられた。

V.「ウチナーンチュ大会」と「県系人ネットワーク」

こうして拡大を続ける「世界のウチナーンチュ大会」は，沖縄からの出移民現象が途絶え，海外のコミュニティとの間で親族関係が希薄になっていく中で，ルーツを共有するという意識を再想起させ，国境を越えた絆を強化しつつ，ウチナーンチュとしてのアイデンティティを醸成するインキュベーター（incubator）のような役割を果たしているといえるのではないだろうか。このことは，今回のアンケート調査における参加者の回答に垣間見ることができる。設問15で「大会」の成果を問われたウチナーンチュたちは，第一に，沖縄の伝統・文化・風土への理解が深まったことを挙げ（74.4%），次に自分が沖縄系であることを認識した（59.1%）と回答している（表3）。4回大会において，すでに参加者の大多数が沖縄県の出身ではないことを考慮すると，海外に生まれた二世や三世たちは，両親や祖父母の故郷を訪れることで，自身のルーツを体感し，アイデンティティを確認する。そして，その土地の人々や風土に触れることで，何故に自分がウチナーンチュであったかという長年の自問自答に，回答が得られたような気がしたということではないだろうか。アンケートの自由記述にも，そうした内容のことが数多く記入されている。

表3　「第4回 世界のウチナーンチュ大会」の成果（設問15）

［単位：票，%］

選択肢　（複数選択可）	回答数	回答率
(1) 移民の歴史への理解が深まった。	449	58.9
(2) 自分が沖縄系であることを認識した。	451	59.2
(3) 沖縄の伝統・文化・風土への理解が深まった。	567	74.4
(4) 海外参加者と県民の交流が深まった	412	54.1
(5) 世界のウチナーンチュ同士の交流が深まった	436	57.2
(6) 世代間の交流が深まった。	351	46.1
(7) 自国の文化を沖縄県民に紹介できた。	199	26.1
(8) ビジネス交流が促進された。	51	6.7
(9) 観光地としての沖縄の魅力を知ることができた。	415	54.5
(10) 平和の大切さを感じることができた。	368	48.3
(11) ウチナーネットワークの次世代の担い手育成のきっかけになった。	266	34.9
(12) その他	30	3.9

資料：「第4回　世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
注：回答率は設問15についての有効回答762票を100%としたもの。

表4　沖縄系移民であるかどうか（設問2A）

［単位：票，%］

選択肢	回答数	構成比
(1)沖縄系移民である	586	77.4
(2)世代がわからない	4	0.5
(3)沖縄系ではない	126	16.6
(4)その他	41	5.4
合　計	757	100.0

資料：「第4回　世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
注：設問2についての有効回答757票。

表5　「第4回　世界のウチナーンチュ大会」に参加した感想（設問13）

［単位：票，%］

選択肢	回答数	構成比
(1)とても楽しんだ	585	78.1
(2)楽しんだ	156	20.8
(3)あまり楽しめなかった	7	0.9
(4)楽しめなかった	1	0.1
合　計	749	100.0

資料：「第4回　世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
注：設問13についての有効回答は749票。

表6　「世界のウチナーンチュ大会」への参加状況（設問10）

［単位：票，%］

選択肢（複数回答可）	回答数	回答率
(1)第1回大会（1990年）	61	8.1
(2)第2回大会（1995年）	91	12.1
(3)第3回大会（2001年）	159	21.1
(4)今回が初めて	543	72.1

資料：「第4回　世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
注：回答率は設問10についての有効回答753票を100%としたもの。

興味深いのは，この大会が，ウチナーンチュの血縁者のみならず，それ以外の人々（配偶者や友人たちであろうか）をも巻き込んで沖縄ファンを生み出している様子がうかがえることである。設問2の沖縄系であるかどうかの質問に対して，約17%の回答者がそうではないと答えているが（表4），沖縄の地理的条件（海外からの利便性）などを考慮すると，この割合は決して低いとは思えない。つまり，ある程度モチベーションが高くないと，経済的にも距離的にも，気軽に実行するような旅行ではないように思うし，たとえハワイが比較的近く，また参加者が多いといえども，自分の居住地と似たような島嶼地域に観光を

主目的として来訪するとは考えにくい[11]。このことは，沖縄の，あるいはウチナーンチュの文化が「他者」をも巻き込んでネットワークを形成している証左とも読み取れ，また，こうした傾向を歓迎する県人会[12]の存在もその背景にあるのだろう。

ところで，ウチナーンチュ大会の参加者が回を重ねるごとに増加してきていることは先述した通りだが，そうした背景が参加者の満足度と参加状況（回数）に示されていると筆者は読み取る。参加者の満足度は表 5 に見られるように高い数値を示しており（「とても楽しんだ」と「楽しんだ」で 98.9%），参加状況についていえば，初参加者とリピーターの割合が概ね 7：3 になっている（表 6）。この両方の数値から想像されるのは，この「大会」の参加者がその満足度と感動を周辺の人々に伝え，口コミで新たな参加者を勧誘しているという，その拡大傾向の健全性である。この種のイベントにおいては，一部の人々のみが満足して参加を繰り返すようでも，逆に，一度参加した者にリピート意欲を起こさせず，結果として初参加者に偏るようでも，将来の発展は望めないからである。

このようにして，「大会」でウチナーンチュとしてのアイデンティティを刺激された参加者たちは，越境的に繋がるネットワークへの意欲を増大させ，同時に，ネットワークの拡大と深化はまた「大会」を要請するという循環が機能し始めているといえるのだろう。

Ⅵ.「県系人ネットワーク」のインパクト

ところで，「ウチナーンチュ大会」と相乗効果を生み出しながら深化していく「県系人ネットワーク」は，その当事者や関係者という枠を超えて，再び広く沖縄県民と海外ウチナーンチュ・コミュニティを結びつけ，新たな社会空間を模索しつつあるようにも見えるが，そこにはどのような今日的意義があるのだろうか。

考えてみれば，海外移民が沖縄の社会現象であった頃，ウチナーンチュたちには自然な形で海を越えた絆があり，そこには「ネットワーク」という意識は強くなかった。遠く離れた親族は自然なこととしてお互いを想い合い，そうした人々が数多くいることでコミュニティ同士も集団的に繋がっていたのである。

そうした状況が過去の出来事となった現在，改めて「チムグクル」[13]と「ユイマール精神」[14]でもってウチナーンチュが連携し合い，よりよい生活を目指してネットワークを形成しようという機運が高まっているのだとすれば，そのルーツの地である沖縄島には具体的にどのような「効果」を生み出しているのだろうか。沖縄県が多額の自主財源を投入[15]して主導する「ウチナーンチュ大会」も，全県的なイベントにしては「県民の参加が不十分だ」との声がアンケートの自由記述にも見られ，今大会に残された課題の一つであると思われるが，筆者は，県系人ネットワークが沖縄島に与える意義とインパクトを，下記のような現象に観察できると考える。

1）社会活性効果

沖縄県は，第4回世界のウチナーンチュ大会の開催による経済効果を初めて試算し，数字で計れない効果もあるとした上で，計測可能な波及効果の総額が11億5千7百万円であったと報告した[16]。国際コンベンションアイランドを標榜する観光立県の沖縄としては，たとえ5年毎ではあっても，海外から数千人規模の人々が来訪し，こうした経済効果を生み出すというのは，それなりに意味のあることであろう。しかも外国人観光客の伸びが低迷する状況[17]の中で，それは唯一増加し続ける沖縄的な「元気印」なのだ。

また，ラテンアメリカにウチナーンチュ・コミュニティの存在があり，「ウチナーンチュ大会」では大きな国際会議の実践経験を積んでいるという背景と自信があって，あの世界最大級のコンベンションといわれるIDB（米州開発銀行）年次総会の沖縄開催[18]誘致にも成功したことは想像に難くない。それに先立つ2005年九州・沖縄サミット（主要国首脳会議）の誘致に際しても「大会」の経験は功を奏したといわれている。こうした状況を観察すると，「移民」が社会現象であった時ほど比重は大きくないとはいえ，海外ウチナーンチュ・コミュニティは，今でも沖縄の振興開発の一翼を担っていることが分かる。

2）国際理解教育の深化

先述したように，第4回大会では，開催に合わせて「一校一国運動」が企画され，県内で広く展開された。県内約100校の教育機関（小・中・高校）で，延べ1万人の若者たちがウチナーンチュの住む諸外国について自主的に予備学習し，現地の学校とも文通などで交流しながら，「大会」の際に来沖する世界のウチナーンチュたちからじかに体験談を聞くというプロジェクトは画期的であった。ややもすると，「国際理解」が即，英語学習と欧米理解に直結しがちな日本にあって，自分たちの足元から多様な世界へと繋がっていることを実感する意義は大きい。しかも，そうしたウチナーンチュたちの苦労話や体験談の中に，沖縄へとむけられる熱い想いと，そう遠くない過去の時代に県民が受けた深い恩義を知ることは，一歩進んだ国際理解の可能性を含むものである。

沖縄県の特色ある大学として平成6年に開学した名桜大学でも，その教育理念を具現化させる形で，県系人ネットワークを活用した教育システムが確立している。国際学部のカリキュラムの一貫として，毎年のように南米研修を実施しており，平成8年から19年までに延べ634名が参加し，大学の重要なプログラムとなっている。約3週間のプログラムに参加した後に再びブラジルやアルゼンチンに留学する学生も少なくなく，その数は平成19年までに71名に上り，現地日系企業などでのインターンシップも導入されつつある。さらに，こうして習得した外国語力や国際体験が功を奏し，帰国後に公務員や在日外国公館などの就職へとつなげている事例も少なくないと報告されている[19]。確かに，外国語系ではない大学の教育システムとしては全国的にも珍しく，同学がこのような実績を蓄積で

きた背景には，南米諸国にあるウチナーンチュ・コミュニティのサポートが極めて重要な要素になっていることが強調されている。

3）沖縄文化の覚醒

ところでウチナーンチュがウチナーンチュたる所以は，当然なことながらその文化にある。その沖縄の文化は，時代と共に変容を余儀なくされるものでもあるが，世代間でどのように継承されるかは，すなわち今後のウチナーンチュ・コミュニティのあり方を決定付けるものである。文化の世代間での継承に危機感を抱く海外のウチナーンチュたちはこの課題を意識しており，故郷沖縄における文化変容の状況にも少なからず関心を寄せている。その象徴的なものの一つとしてことばの問題が挙げられる。

沖縄の文化は，「チムグクル」や「ユイマール」という精神風土の周辺に，その芸術的表現手段としての伝統芸能などが合わさって表象される。そして，こうしたキーワードの表現方法にも象徴されるように，沖縄の文化を伝える重要な要素がウチナーグチ[20]であると考えるウチナーンチュは今でも少なくない。こうした想いは，海外のコミュニティに暮らすウチナーンチュたちに強いようで，その声が県民にも伝えられる。

第4回世界のウチナーンチュ大会の準備が進みつつある2006年3月29日，沖縄県議会は9月18日を「しまくとぅば[21]の日」とする条例の制定を全会一致で決議した。県議会で議員発議によって行政関係条例が作られるのは，1972年の本土復帰以降3件目という異例のことのようだが，その背景には海外のウチナーンチュ・コミュニティが深く関わっていた。新聞報道[22]によると，県人ペルー移住百周年記念式典出席などのため南米を訪問した県議会議員団が，現地の県系人がしまくとぅばを大切に継承していることに強く感動したことがきっかけとなり，超党派で制定の動きが本格化したという。「ウチナーンチュならウチナーグチを大切にしなさい」と諭されたのであろう。条例の要旨では，「しまくとぅば」を「本県文化の基層である」とし，「次世代へ継承することが重要である」と明言している。

多文化的，多言語的となった世界のウチナーンチュを繋ぐ紐帯がウチナーグチや日本語ではなくなりつつあることは，アンケートの設問6の回答にも見て取れるが（「日本語で話したり聞いたりできる」が45%であった），それでもなお，自分たちのルーツの地沖縄では文化の表現手段としての言語を維持してほしいという想いを込め，それが失われつつある状況に警鐘を鳴らしているのである。ウチナーグチが，沖縄文化の最も重要な要素であるか否かの議論は別の機会に譲るとして，少なくとも，それが比較的よく継承されている海外のウチナーンチュ・コミュニティがあり，その存在が現代の沖縄県民に刺激となって伝わっているということである。ことばに限らず，沖縄特有の伝統芸能（舞踊，音楽など）や空手にしても，ウチナーンチュの海外/県外への移民が国際的な発展への足がかりと

なったことは間違いないし，現在においてもその相互依存関係は続いている。門下生や愛好家などが国際的に裾野を広げることで，伝統芸能の研鑽意欲は一層高まり，ウチナーンチュは自らの文化への誇りと自信を深めているともいえる。そういう意味で，海外/県外の県系人コミュニティは，沖縄の伝統文化を刺激し，時に矯正する，一種の「覚醒装置」といえないだろうか。

Ⅶ. おわりに

「第4回世界のウチナーンチュ大会」では，世界に広がる県系人ネットワークの核は「チムグクル」であり，それが県系人ネットワークの求心力であると強調された。やや抽象的な感は否めないが，そのことはほとんどの参加者によって賛同を得たように見える。ビジネス交流を提唱する WUB インターナショナル会長の与那嶺真次氏も，「これから世界のウチナーンチュは四世や五世の世界となっていくが，大切なことはチムグクルだ。チムグクルがあれば，どこにいてもウチナーンチュのアイデンティティを持つことができる」[23]とその経済活動の中心もチムグクルであると強調している。

世界各地に在住するウチナーンチュたちがルーツを求めて参集する「ウチナーンチュ大会」が，回を重ねていくごとに拡大し，多文化的で越境的なアイデンティティを練成していく様子は驚異的でさえある。第4回世界のウチナーンチュ大会の事務局長を務めた知念栄信氏は，こうしたウチナーンチュの移動形態を「魂の栄養の補給に帰ってくる，メッカ巡礼に似ている」[24]と表現したが，いいえて妙である。ただし，沖縄の心へと向かうこうした熱い想いが，「聖地」にいる県民にも同様に理解され，次世代の若者たちに広く浸透させ得るかが今後の課題である。

ウチナーンチュの「チムグクル」が時空を越えて共有され，特にルーツの地沖縄島にいる県民に「ウチナーンチュ大会」の持つ意味がより深く理解されるとき，「県系人ネットワーク」はより強力な磁力を有するようになり，より高い次元での共生の心というものを我々に提示し，多様性を維持しつつも国境にとらわれない，新たな沖縄社会という空間を形成していくものと思われる。その輪郭を，我々は第5回大会に見ることができるであろうか。

注

1)　琉球語（沖縄方言）で，もともと沖縄人を意味するが，ここではより広義の沖縄系の人々（外国籍を含め）を指して使用する。

2)　同表は，沖縄県観光商工部交流推進課による調査と算定式による数値である。当然のことながら，日系人の人口を確定するための国勢調査のようなものがあるわけでもなく，何をもって日系人あるいは沖縄系とするかなどの議論もあり，あくまでも推定の域を出

ない。

3) その他の要因としては，王国時代の地割制の崩壊による土地の私有化に伴って渡航費を捻出することが可能になったことや，あるいは徴兵忌避なども移民へと向かわせた要因であったと考えられている。琉球王国時代の伝統を受け継ぐ海外雄飛の逞しい精神があったとする見方もある。

4) 太平洋戦争で壊滅的な被害を受けた沖縄の惨状を知ったハワイの沖縄出身者たちは「布哇連合沖縄救済会」を立ち上げ，募金活動やチャリティー公演を行い，集まった5万ドルで豚550頭を購入し，米国の軍用船で沖縄へ送り，当時の食糧難を劇的に改善したという史実。

5) 1990年に開催された第一回世界のウチナーンチュ大会を契機に，沖縄県と海外ウチナーンチュ社会の人的ネットワークを拡充強化し，国際交流の推進などを目的に，沖縄県によって設置された制度。県人会の推薦などをもとに沖縄県知事が任命するが，2007年3月末現在，24カ国・地域から188人が認証を受けている。

6) 世界各地に散在しているウチナーンチュのビジネスマンと連携し，国境を越えたビジネスネットワークの構築と会員相互の研鑽や親善を目的に，1997年にハワイで設立された団体。ハワイを皮切りに，北米や東京，沖縄などで世界大会を毎年開催。11回大会を終えた2007年9月現在，世界に21支部，会員は532人と着実に増え，その知名度も浸透しつつある。

7) 「海外県系人子弟を沖縄県に招待し，県内外の児童生徒とともに，沖縄の歴史，文化，自然などの体験学習をとおして，母県・沖縄との絆を深めることにより，県系人社会の発展とウチナーネットワークを担う次世代の人材育成に貢献する。」との目的を掲げ，2001年の「第三回世界のウチナーンチュ大会」のプレイベントとして実施された県主催の事業。世代交代が進む海外県系人社会の若い年齢層にウチナーンチュアイデンティティの継承が図られる一方で，県内の児童生徒が，海外の若い世代との交流の中で国際的視野を広げる効果を持つとの評価を受け，2002年から新規の事業となり，毎年実施されている。一週間という短い期間ではあるが，毎年数十名の県系人子弟が多国間で交流する意義は大きい。

8) ウチナーンチュの移民体験と実態を伝えるためのテキストとして作成された県内初の移民学習教材。

9) 「世界のウチナーンチュ大会」を契機に，沖縄の子どもたちに，沖縄とつながる世界のことや世界のウチナーンチュについて知ってもらおうと，4回大会に初めて取り組まれた事業。一つの学校が一つの国や地域についてじっくり学ぼうという趣旨で，県内の100校が参加し，大会参加に来県する様々な地域の多くのウチナーンチュが出前授業を行い，延べ1万人がプロジェクトに参加・学習したと報告されている。

10) ウチナーネットワークにおける交流の活性化と，若い世代の交流促進を図るため，世界各地のウチナーンチュ子弟および沖縄県の子供たちが，双方向で安心して，廉価で行き来できるようにとの趣旨で沖縄県が提唱する制度。2007年度から参加者の募集を開始。

11) 沖縄県は観光の先進地としてハワイを範としているのであり，観光客を対するアメニティもハワイの方が全体的により成熟していて楽しめる，というのが一般的な見解であろう。

12) 例えばハワイ県人連合会では，遺伝的なウチナーンチュではなくても，会の趣旨に賛同して共に活動したいという人々をUchinanchu at heartとして歓迎している。

13) 他人を深く思いやる心，また熱い想いや情熱を表す琉球語。

14) 相互扶助や助け合いを意味する琉球語。

15) 第4回大会のために約3億4千万円の支出がされた。

16) 琉球新報掲載の記事（2007年4月8日）より。
17) 沖縄県観光商工部の『平成19年度観光統計実態調査』によると，平成18年度の沖縄県への外国人観光客は92,500人であり，対前年比でマイナス32.2%であった。
18) 米州開発銀行（IDB）が場所を変えて毎年開催する大規模な国際会議で，ラテンアメリカからの参加者が多いのが特徴である。沖縄県は，他都道府県との熾烈な誘致合戦を繰り広げた末に，沖縄での開催（2005年）を最終的に勝ち取った。
19) 日本国際文化学会第6回大会（2007年7月14日，名桜大学）における住江淳司名桜大学准教授の研究発表要旨より。
20) 琉球語または沖縄方言のこと。
21) 沖縄方言で「しま」とは地域または共同体のことで，直訳すれば地域の言葉という意味だが，この場合ウチナーグチと同じ意味で使用されている。
22)『琉球新報』2006年3月8日の掲載記事より。
23)『琉球新報』2006年10月13日，世界のウチナーンチュ大会特集記事より。
24) 日本国際文化学会第6回大会（2007年7月14日，名桜大学）における知念栄信氏の研究発表要旨より。

（きんじょう　ひろゆき・琉球大学移民研究センター准教授・言語社会学）